令和７年度第２回山形県農林水産技術会議　議事録

開催日時：令和８年２月１０日（火）１０：００～１１：３０
開催場所：山形県建設会館中会議室No.２、オンライン

出席委員（五十音順）

網干貴子　委員	井上　夏　委員	菊地　郁　委員	木村直子　委員
渋谷知暉　委員	西澤　隆　委員	藤田直樹　委員	山中高史　委員
我妻飛鳥　委員			

欠席委員

岡部優子　委員	押野和幸　委員	曽我朋義　委員	養松郁子　委員

１．諮問

山形県農林水産技術会議に対し、農作物の優良品種の改廃について諮問（資料１）。

２．審議

（１）農作物の優良品種の改廃について

農業技術環境課から資料３「奨励品種制度の概要について」説明し、県産米戦略推進課から資料４を用いて諮問内容について説明。

委員から質疑なく、諮問内容については提案のとおり了承。

（２）山形県農林水産研究開発方針の見直しについて

農業技術環境課から資料７「山形県農林水産研究開発方針の見直しについて」を説明。その後、資料８「現方針期間における研究開発の主な成果と今後の課題」について各試験研究機関から説明し、農業技術環境課から資料９「山形県農林水産研究開発方針の方向性（案）」を説明し、次期研究開発方針の方向性について委員から意見等を聴取した。

委員：推進期間が５か年計画ということで、５年かけて品種改良した後で方向性が変わってしまうなどの問題が生じないのか、懸念を感じた。

技術開発して利用可能にはなるが、実際に農業者が試したり、現場で利用できる状態になるまではハードルがあると思う。導入コストや農業者側

の時間的な問題等があるため、開発された技術が現場で利用されるところまでの一連の流れの対策を講じてもらえると助かる。

また、現在の夏季の高温では、栽培時だけではなく流通時にトラックの荷台が高温になって卸先に到達してから問題が発生したということがあった。栽培技術の開発だけでなく、販売先や輸出先など、その先のサポートや対策も合わせて進めていただけると助かる。

委員：稲作農家の「ゆきまんてん」への期待度は高く、これからが楽しみだが、消費者に認知され購入されるまでの大変さが現実問題としてある。

また、ＡＩ等を利用する方針は素晴らしいと思うが、導入にお金がかかるため補助金などでハードルを下げて技術を使い易くすることも必要と考える。

後継者不足については、現場ではかなり深刻で、あと５年経ったら、本当にどうなるのだろうと感じている。研究も大事だが、離農対策を県全体でも頑張っていかないといけないのではないかと感じる。

委員：果樹類のオリジナル品種等の開発でＤＮＡマーカーの開発と進んでおり、さくらんぼなどは次世代シーケンサーと機械学習を組み合わせたゲノミックスデータ解析等が実用レベルに近いと伺っている。解析コストが高いので、あまり頻繁に使える技術ではないようだが、研究成果をうまく活用し、ＤＮＡマーカー技術を発展させ選抜モデルの作成等に引き続き力を入れてほしいと思う。

委員：未利用資源の利用の拡大を考えると農業や食品製造業で出る残渣を肥料化もしくは飼料化を模索すると良いのではないか。ミルワームなどの昆虫に残渣を分解させ、糞を有機肥料、成長した昆虫を魚の飼料することで飼料の国内自給率の向上に繋がり、残渣が有価物に変わる。資源循環モデルが認められればＳＤＧｓになる。

県オリジナル乳酸菌利用は、菌の優位性または機能性が認められるものがあれば、商品化に繋がると考えられる。園芸分野のバイオ炭については、消臭資材として工業用品にも転用でき、商品化、社会実装化できれば非常に面白いと思う。

委員：水産分野では近年の温暖化問題の他、養殖業では豪雨の被害も出ていたと記憶している。雨の問題は屋内飼育でかなり対応できる可能性があると

思うが、可能であれば屋外養殖へ何らかの対応策ができるといいのではないかと思う。

委員：畜産に関して、最近は種雄牛を持たない県があるが、山形県での種雄牛の扱いはどのようになっていくのか。また、エサ代の高騰を考えると、出荷体重への影響を小さくした肥育期間の短期化等はどうか。

畜産研究所所長：種雄牛については、本県では今後も和牛の雄牛を持ち、県内に遺伝子を入れていくことを継続する予定である。

飼料費高騰の中で肥育期間短縮の方向性は確かにあるが、山形牛、米沢牛の特徴が全国に比べて肥育期間が長いことが挙げられるため、研究の方向性としてはあると思うが、ブランドの方向としては難しいと感じる。

委員：今年度大きな問題となっているツキノワグマについて、剥皮被害の予測と防除マニュアルを研究成果として出されているので、これをいかに伝えていくかが大事だと思う。

キノコに関して、収益を上げるキノコ栽培は地域にとっても大事だと思う。収益性を高めるためには、他の地域との差別化を図る栽培品種や機能性を付加できる栄養成分の摂取が可能なキノコ品種の開発などが大事だと思う。

庄内の海岸林については、クロマツ以外の樹種を導入することも大事だが、他の樹種にしたときに海岸林に対して期待される機能が発揮できるかどうかという視点が大事。複数の樹種をうまく配置して、松枯れ対策と機能維持を両立した海岸林を作っていただきたい。

委員：河川環境モニタリングに関する記載があるので、海洋環境のモニタリング、可能であればリアルタイムの方向性も加えてはどうか。先端技術の活用については、底引き網漁船の操業位置情報などをＩＣＴ機器の活用によりリアルタイムでモニターできる体制ができているので、成果として考えてはどうか。

委員：感想だが、野菜花き分野の成果と課題を見ると個別課題が多いイメージ。どうしても野菜花きは品目が多く、山形県の場合は経営規模や地域の差が大きいため、分散型になるのは仕方がないと思う。しかし、今後の地域人口の減少や生産人口の減少を見据え、野菜生産を産業として維持する

ことを考えたときに個別課題の積み重ねだけでは厳しいのではないのかと思う。より中長期的に体系立てて研究課題を大きく考えられると良いのではないかと感じた。

委員：方向性（案）の検討すべき視点に掲載のあるバイオスティミュラントについては科学的効果検証が必要と考える効果や有効成分或いは有効になる条件基準などしっかり検証しないと、効果のない資材が流通したりコストをかけたが効果がないなどの弊害がでるため、しっかりと取り組んでいただきたい。

委員：多くの案件、課題に取り組まれており、いつも感心している。基本的な方針については問題ないので進めて良いと思う。今後の気候変動や労働力不足を考えると、ロボット化とＡＩの活用を積極的かつ効率的に進めることが重要だと考える。

委員：県単独では難しく、色々な問題もはらむと思うが、米国では最初から種苗を売ることを考えた品種戦略を立てているため、外国に真似されることがない。そのため、米国のいちごの場合、農産物の生産は日本と同様に横ばいか減少傾向だが、いちご生産が増加しているメキシコやトルコで米国の品種が使われているため、米国は種苗の売り上げが大きい。法的整備が必要で難しいところがあるうえ、国内の個別農家に貢献するかと言われると難しい問題であると思うが、日本の農業全体の活性化、ＧＤＰへの貢献を考えると、将来的にはそういう方向性も必要ではないかと考える。

以上